令和５・６年度第４回国分寺市青少年問題協議会

日　　時：令和５年 11 月 10 日（金）　午後２時～４時
場　　所：ｃｏｃｏｂｕｎｊｉプラザ　リオンホールＡ
出席委員：成瀬大輔（会長），田中久美子（副会長），長谷川久見子，井上和憲，右髙博之，西川葵，熊沢渉，青木伸道，田中芳幸，瀧山美恵
事 務 局：子ども家庭部子ども若者計画課（千葉課長・城内担当係長）
傍 聴 者：２名

会　　長：それでは定刻になりましたので，これより令和５・６年度第４回国分寺市青少年問題協議会を開催したいと思います。本日の協議会の成立と資料につきまして，事務局から報告をお願いいたします。

事 務 局：本日の協議会の成立についてご報告させていただきます。委員 12 名中現在の出席委員が８名，欠席・不在の委員が４名となっております。委員の過半数の出席がございますので，国分寺市青少年問題協議会条例第５条の規定により，本日の会議が成立することを確認いたしました。

　また，本日お配りしている資料については，次第が１枚，そのほか，前回の議事録の確定版をお配りしております。本日の会議の成立と資料の確認は以上となります。

会　　長：ありがとうございました。会の成立が確認できましたので，これより令和５・６年度第４回国分寺市青少年問題協議会を開催いたします。

　では，次第に沿って進めさせていただきます。本日，今期のテーマであります「不登校の今を考える」について勉強会を行います。今回の勉強会は，以前委員の皆様から不登校支援をされているカタリバさんのお話をお伺いしたいと意見を頂いておりました。それを基に事務局に調整いただきまして，本日お忙しい中，認定ＮＰＯ法人カタリバさんより瀬川知孝さんにお越しいただきました。カタリバさんは，不登校に関する支援事業としてオフラインだけではなくオンラインでの支援など様々な支援をされております。その中で瀬川さんは，オンライン不登校支援プログラム「ｒｏｏｍ－Ｋ」のプロジェクトマネジャーとして自治体の事業やコンテンツ開発，事業企画などを担当されております。本日は瀬川さんにカタリバさんのオンライン不登校支援のプログラムの紹介や，活動を通じて感じる子ども，保護者，学校などの現状や声などについてお話を頂きます。

　それでは瀬川さん，よろしくお願いいたします。

講　　師：カタリバの瀬川です。よろしくお願いいたします。では，ここから私のほうからいろいろとお話をさせていただきたいと思います。

最初に簡単に自己紹介をさせてください。カタリバには不登校を支援するプログラムだけではなく，ヤングケアラーの子どもたちを支援するプログラムや，経済的に苦しいご家庭の子どもたちにオンラインを通じた様々な学習機会，体験機会を届けるプログラムなど，オンラインを活用した事業が幾つかございます。私は，その何らかの困難を抱えた子どもたちをオンラインで支援するオンライン事業の責任者をしております瀬川知孝といいます。僕は 2015 年からカタリバで働いているのですけれども，その前は教員を４年間やっておりました。小学校とその後，中高一貫校で働いておりまして，その後カタリバに来てからは文京区にある青少年プラザｂ－１ａｂという中高生世代の居場所の副館長，それから今は岩手県の大槌町の総合教育会議の中で，不登校の問題を議論している委員などをやらせていただいています。今日は，皆様に何か参考になるお話ができればと思っております。よろしくお願いします。ちなみに，私はここの近くにある学芸大学に昔通っていたので，すごく国分寺に来るのが久しぶりで，すごくワクワクして来ました。僕が学生の頃は，もう 11 年以上前だったのですけれど，当時から駅前がすごく変わっていて驚いているところです。

では，まずカタリバの紹介を簡単にさせてください。カタリバは「どんな環境に生まれ育っても未来をつくりだす力を育める社会」というビジョンを掲げて，もう 20 年以上活動してきている教育ＮＰＯでございます。不登校支援以外にも実はたくさんの事業をやっておりまして，大きく３種類の事業を行ってきております。

まず１つは，サードプレイス型事業といって，僕が以前いた文京区の施設なんかもそうでした。実際にリアルな居場所を持って，基本的には行政からの施設の運営委託のような形なのですが，実際に子どもが通って来られる居場所を作っているようなタイプの事業。

それから，２つ目は学校にプログラムを提供するような事業もやっております。これは，今でいうと探究学習に関する授業でしたり，最近だと校則改定に関する取組なんかもやっています。

３つ目が，行政とのハンズオン支援になります。私が担当しているオンラインの不登校支援プログラムは，基本的には行政，教育委員会と連携させていただいて，その行政の中で本当にオンラインの支援が必要な子どもたちをつないでいくような，かなり行政と連携したような事業の仕方を進めています。カタリバ単体で何かをするのではなく，その地域のプレイヤーだったり，行政・学校の皆さんと一緒に子どもたちの支援を作っていく，考えていくというのが私たちの団体の１つの特徴になっております。

今日は不登校支援の取組について主にお話しさせていただくのですけれども，カタリバの不登校支援の取組は実は３つやっております。

１つは，島根県で教育支援センターの運営を受託して，もう９年目ですが島根県で教育支援センターを運営しています。これまでは適応指導教室などという呼ばれ方もされていまして，今でも名称は併用されていたりしますけど，いわゆる不登校の子どもたちを受け入れて学習支援等，それからソーシャルスキルトレーニング等を行っていくような，これは教育委員会の機関です。

次に，足立区ではアダチベースという，これは僕たちが行政から委託を受けて教育支援センターとは別に子どもたちの居場所を作っている施設です。ここも学習支援等をしているのですけれども，特徴としては特に経済的にちょっと苦しい子が多くて，一緒にお昼ご飯を食べたり，食事の支援なんかもしているというのが１つ特徴になっております。

最後が，オンライン不登校支援プログラムの「ｒｏｏｍ－Ｋ」というもので，これが私が主に担当しているものです。メタバースを使ってオンライン上に子どもたちの居場所を作り，加えて，定期的に子どもたちとオンライン面談をすることで，オンラインで子どもたちとしっかり接点を作って，学校やそれ以外の支援とどうしてもつながれないという子どもたちにも支援を届けていこうという取組になります。今日の後半で，それぞれの取組についてもいろいろお話しできたらと思います。

今日の流れなのですけれども，こんな感じを考えております。まずは，先月文科省からデータも出ましたので近年の不登校の状況を見て，ちょっとマクロ的に不登校の状況を見ていけたらと思います。その後に実際の不登校の子どもたちの実態，もちろん細かくいうと不登校といっても個々の子どもたちは全然違うのですけれども，その中から見えてくる傾向や私たちが大切にしているより添い方などをご案内させていただこうと思います。その後に今お話しした島根県，足立区，それからオンラインの取組などをご紹介させていただいて，最後に，具体的な子どもの支援事例，子どもの声といったものを紹介させていただいて，１時間ちょっとぐらいで終わっていこうかなと思いますのでよろしくお願いします。

最後にぜひ質問等頂ければと思いますので，ぜひ皆さん，気になることがあったら聞いていただけたらと思います。

まず，近年の不登校の状況についてというところから入っていくのですが，まずは不登校の前に，そもそもの子どもたち，児童生徒の在籍数の推移というところなのですけど，皆さんもご存じのとおり，少子化によって子どもたちは顕著に減少しているという形になっています。小中学生と高校生を示していますけれども，小中学生でいうと５年間で 32.8 万人減っていますよという形ですね。これはもう不登校関係なく，いろいろなところで聞くようなニュースですけど，そもそも子どもたちの在籍数は顕著に減っていますよという前提をちょっと共有しておきたいと思います。

その状況にあって，次は世代別の不登校の出現率というのがどういうふうに変わっているかということなのですけれども，先月出た最新のデータに基づいております。これを見ても分かるとおり，出現する確率・割合というのも残念ながら右肩上がりに増えています。不登校と長期欠席というのを分けて書いているのですけど，不登校は一番上 1.7%となっています。長期欠席は 3.2%。右にも書いていますが，30 名のクラスに約１名程度の長期欠席児童がいるということで，本当に１クラスに１人はもう長欠している子どもたちがいるよという，そういう状態になっています。長欠と不登校の違いなのですけれども，いわゆる病気による欠席ですとか，あとはここ２年はコロナ感染回避みたいな理由が不登校とは別に欠席理由として挙げられたりしているのですけど，不登校という欠席理由を選んでいないけれども何らかの形で長期間学校から離れている，欠席になっている子どもたちを長期欠席としています。そこで見ると非常に高い割合になっています。

生徒というのは中学生ですね。中学生はもっと高くて，中学生の長期欠席出現率は令和４年で８％を超えているような状況です。１クラス 30 名クラスでいうと２名以上長期欠席がいるということで，本当にもうこんなことを言ったらあれですけど，全く珍しくないのですよね。どこにでもいるというか全てのクラスにいるぐらいの，いよいよ出現率になってきている，そんな状況になっております。

高校生ですが，今日はあまり高校生にそんなに大きく触れないのですけれども，ここでも高くなっていると。どの世代，小中高どこを取っても不登校の出現率が高くなっているというのが近年の状況になります。

長期欠席の推移と不登校の推移というものをここで並べてみました。これは不登校と長期欠席を分ける意味があるのかという声もあるのですけど，世の中的には不登校が何人みたいなニュースが出ることが多いです。でも，不登校の背景も様々理由があるので，本当に不登校という一くくりと病気による欠席というのを分ける意味が果たしてあるのだろうかというのは，私も非常に疑問に思っているところでして，やはり長期欠席がどのくらい生まれてしまっているのかというのを見ていくのはすごく大事なことなのではないかなと考えております。長期欠席はこの５年でほぼ２倍になっているということで非常に増えております。不登校の推移もこれとほぼ同じような感じで増えているのですけれども，とにかく最近ニュース等で言われるように，この不登校・長期欠席というのはこのコロナ禍の影響も相まって，非常に右肩上がりになっているというような状況があります。

もう少し見ていくと，まずコロナの影響というのがこの数年ですと，すごく考えられるところかなと思います。ちょっとここに書いたのですけど，ただコロナの影響で学校を休みました，コロナの影響で長期欠席になっていると回

答する割合というのはすごく減っているのですよね。令和３年から令和４年はマイナス 2.5 倍ということで半分になっています。これはどういうことか考察してみると，これは大人もそうですけれども，社会の風潮としてコロナの危機感というのは希薄にはなってきているかなと思います。なので，コロナ回避という理由で欠席をしている子どもたちというのは大きく減っている。とはいえ，全体の小中学生の長期欠席数は増加しているので，これは背景にどんな理由があるのかなというのは，まだまだ調査が必要なのかなと感じております。

これは不登校をもう少し詳細に見たデータになります。皆さん，不登校というのは年間 30 日以上欠席すると不登校という扱いになります。ここで，30 日と 100 日を同じように扱っていいのか，という問題が出てきます。これは，30 日から 89 日休んだ児童生徒の推移，欠席日数 90 日以上かつ出席日数 11 日以上。３つ目は，出席日数 10 日以下の児童生徒と程度で分けたグラフになるのです。ただ，これも残念ながら，どの区分も満遍なく増加しています。30 日だけ休んでいる子というのは，一旦それまでは学校に行っているのですよね。一方で，10 日以下，ほとんど学校に行っていないという子，これは両方増えています。この５年で何倍になっているかというのも，かなり近しい数字になっているので，どの区分もやはり満遍なく増加している。

ここのグラフをもってどんなことを言いたいかというと，30 日だけ休んでいる子と全く１日も登校しない子を同じ支援で支えられるのかというのは，僕は考えなければいけないポイントかなと思っております。それぞれの区分の子どもたちについて一体どんな支援が必要なのか，これを考えてみる必要があると思います。

ちょっと皆さんにも考えてみてほしいのですが，どんな子どもたちの姿が想像されますか。欠席日数 30 日から 89 日。ちょっと分かりやすく年間 30 日くらい休んでいる子の姿と，全く行っていない子。それぞれ皆さんどんな子どもをイメージするか，ちょっとぜひ想像してみてほしいなと思います。これは，もしかしたらやはり同じ不登校とはいえ，少し違った子どもたちの姿が想像されるのではないかなと思います。そういう子どもたちの姿を想像したときに，じゃあそこには一体どんな支援があったらこの子どもたちをサポートできるのだろうか，やはり不登校というものを一くくりの１種類のものとして見てはいけないのではないかなと私たちは考えています。

もうちょっとだけこのデータの話を続けていくのですけれども，これは継続層についてというものなのですけど，不登校を継続している，つまり昨年度も不登校だった，今年度も不登校だったという不登校状態が継続している割合というのがどんなふうに推移しているのかというものです。さっきのものと違ってグラフが見づらくて申し訳ないのですが，昨年度のこの割合というのは，小学生と高校生の率はちょっと減ったのですよね。中学生はちょっと伸びてし

まったのですけれども，今年度は全ての段階，小中高でまた増加に転じています。これもやはり先ほどの話と重なるのですけど，長期間不登校，３年間不登校ですという子どもと，この２か月３か月で不登校の傾向が出てきましたという子どもでは，やはりここでも必要なサポートが変わってくるのですよね。これは長期化している子どもなのか不登校の初期段階なのか，ここを見極めてそれぞれに対処していく必要があるというのも１つのポイントかなと思います。

次は，学校の内外で子どもたちが支援にどのくらい接続されているのかというデータになります。これもちょっと残念なデータなのですけれども，不登校の子どもたちは増えていますが，どの機関の支援にもつながらない児童生徒というのがすごく増えているのですよね。これは右側のグラフが分かりやすいのですけど，支援を全く受けていない児童生徒の推移というのも右肩上がりでどんどん増えています。やはり増加する不登校の子どもたちに対して，公的な支援が追いついていないというのが，こういうグラフを見ると分かるのではないかなと思います。

さらに，今度は学校内外での支援というところで見ていくのですけれども，支援を受けている人数自体は減っているけど，教育支援センターの利用割合というのは低下している。一方で，民間の利用割合は増加している。民間のフリースクールとかいろいろありますよね。民間の支援を利用している人は増えています。一方で，教育支援センターですね。自治体，行政，教育委員会が用意する不登校の子どもたちを支援する機関，場所についての利用割合というのは低下している。これは，必ずしも利用している子どもが減っているというわけではないと思うのですけれども，やはり増加に対して追いついていないというのが大きな原因かなと思います。

そして，よくこれは保護者の方が気にされることが多いのですけど，教育支援センターを利用したり民間のフリースクールを利用したりしたときに，じゃあそういうところで支援を受けた，学習したということを学校の出席に代えてもらえる，出席扱いにしてもらえるというのが，基本的には校長先生の判断で可能になっています。実際，私たちのオンラインの支援を受けたり，リアルの居場所施設を使った子どもたちが，そこの利用をもって学校の出席扱いをもらえたというケースはかなり多くあります。ただ，これも全体で見ると学校外の支援を受けて出席扱いにしてもらえる割合というのは，残念ながらずっと低下しているのですよね。これも繰り返しになってしまうのですけれども，別に出席にしてもらえるということ自体が減っているわけではなくて，これもやはり増加に対して出席認定することが追いついていない。全体的に支援の数であったり，そういった外部での支援を認めていこうという風潮の広まりというのが，やはり不登校の増加に対してちょっとペースが遅いという形になっているのかなというのをすごく感じるところです。

データの話はここまでなのですけれども，これも近年言われるようになったことで，ＩＣＴを使った学習，例えば今はＡＩドリルとか様々なデジタル教材があります。そういったＩＣＴを使って学習したことを出席に代えていきましょうという，これは文科省も言っていることなのですけど，これが最初に通知があったときに，このＩＣＴの学習を出席に代えるというのが増えてきていました。特に令和３年はコロナの影響があったのでぐっと増えたのですけれども，なぜなのかというのを僕らも分析してきたりすると，これはまた減っているのですよね。恐らくコロナの影響も少なくなってきて，改めて学校で学ぶ，どこかの居場所で学ぶということがやはりスタンダードと思われているところももしかしたら関係あるのかもしれません。ここはちょっと私も正確なことは分からないのですけど，せっかくＩＣＴの学習を認めていこうという機運があったけれども減ってしまっているというのは，少し残念なところかなと思います。

ここまでいろいろ見てきましたけれども，まずマクロで見て不登校の子どもたちはすごく増えているけど，やはりそれに対して支援が追いついていなかったり，学びの多様化がうたわれるような世の中になってきていますが，まだまだやはり学校以外の場での学びというのが出席に認定されない，つまり公的には十分認められない，そういう側面があるのもやはり事実で，これは本当にこのままでいいのかなというのは考えていかなければいけないところなのではないかなと考えております。

次に，今度はもうちょっとリアルな子どもの話に移っていこうかなと思います。これは私たちが様々な不登校の子どもたちと接する中で，それから私たち以外の様々な団体がこれまで長い年月をかけて不登校支援に取り組む中で，不登校の子どもたちの心のエネルギーの変化というのがあるよね，不登校の休み始めとまた元気になってくるところを幾つかの時期に分けられるよねと考えている人たちがすごく多いのですけど，私たちも不登校に段階があると捉えて，ちょっとその段階に応じて子どもの理解や具体的な関わり方を考えるということをしています。後でまた少し話すのですけれども，休み始めから初期の段階で，休みに入った休養前期・後期，気持ちが伸びてくる回復期から学校に戻る可能性も出てくる復帰期と分けて捉えているのですけど，やはりこの状況を見つつ段階に応じて適切な声かけや支援をしていかないと，ちょっとそこのミスマッチがあると状況が悪化することもあるというのが，私たちもいろいろと子どもに関わりながら感じているところになります。この各段階がどんなもので，そこで僕たちは一体どういうことを大事にしながら関わっているのかという話を少ししていきたいなと思います。

ちなみに，いっぱいあって分かりにくくて申し訳ないのですけれども，実は不登校の初期に出やすいＳＯＳサインというのが結構たくさんあるので

ちょっとまとめてみました。今日はそんなに細かく触れないのですけれども，結構体に出てくるみたいな子を見ることが多いですね。やはり学校に行こうとするとお腹が痛くなるとか，頭が痛くなるとか，吐き気がしてしまうとか。体に出ているのは明確なサインなので，こういうところからまずはしっかり休養するということが大事になってきます。初期にこういうサインがあった上で，じゃあここから具体的にどのような形で子どもはこの不登校の状態というのが移り変わっていくのか。もちろん，これはちょっと何回も言うのですけど，全員みんながこういう道をたどるというのはやはりどうしても言い切れなくて，原因とか状態は様々なので例外とかはたくさんあるのですけれども，あくまでも大まかなあり得る傾向として聞いてもらえたらと思います。

まずは，初期に体とか心にちょっと異変が出てきて休みの中に入っていくというところで，休養の最初のほうですね。不登校になってしまって本当に学校に行けない，行かないとなって最初の頃に多い状態です。この時期は，多くはやはり心のエネルギーが枯れてしまっているような時期だと捉えています。僕たちが見てきた子どもたちの中であったのは，例えば家族に暴言を吐くとか，やはり昼夜の逆転がどうして進んでしまうとか，ちょっと幼児返りというか子どもっぽく振る舞ってしまったり，あとは先生が家庭訪問に行ったり支援者の方が声をかけても会いたがらない時期がありますし，ちょっとひどい場合は自傷行為とか希死念慮みたいなものが増えることもあります。

こういう時期はもう本当にまず休むしかない時期とも言えるかなと思っているのですけれども，やはりこの時期が一番保護者の皆さんが苦しいようでして，何でこうなってしまったのか分からないし，話もあまり聞いてくれないし，一体この状態がいつ回復するとも分からないので，多くの保護者の皆さんが不安を抱える時期かなと思います。そんな時期なので，私たちとしていつも保護者の方と話して進めているのは，学校や関係機関と協力体制を作っていくことがまずやはり望ましいかなと思っています。この時期であれば，僕らはとにかく子どもより保護者の方と話すようにしています。まず焦らずに，子どもが少しずつエネルギーがたまってくるのを待ちましょうねという関わりをしますし，可能であれば自治体の教育支援センターだったり総合相談窓口みたいなところにまずは相談して，保護者の気持ちを分かってくれる，保護者を支えてくれる人たちとつながっておく，それによって心のゆとりを持てるようにしておくというのがすごく大事かと思います。

子どもの関わりとしては，例えば保護者の方にこんなふうに関わってみてくださいというのは，子どもの興味に関心を持ったり，あと小さなことでも子どもを励ましたり，あまり「学校は？」「勉強は？」ということを言わずに焦らず見守るように関わってみてくださいというお話をしています。本当に何もしていないというよりは，一番よくあるのがやはりたくさんゲームをするみた

いな子がこの時期は多いですけれども，その子どもがやっているゲームを少し「どんなゲームやっているの」とか関心を持ってあげるとか，一緒にゲームするみたいなことをされる保護者の方なんかもいて，それはそれですばらしいなと思うのですけど，子どもに興味を寄せる。もちろんあまり近すぎると煙たがられたりもしますけれども，適切な距離感で興味を寄せるとか，ちょっとしたことで励ますというか。今日ちょっと早く起きれたねとか，どんなことでもいいです。ちょっとでもここは褒めてあげることができるのではないかというところを見つけて，声をかけてあげるみたいなことがこの時期にお勧めしている関わり方になります。

次が，この休養が少し進んで少しずつ子どもが落ち着いてくるということがありますけれども，休養後期の時期は，例えば家族とちょっと出かけることができるとか，生活リズムが少し整ってくるとか，趣味とか遊びに興味が湧くとか，ちょっとだったら人と会って話してもいいよという反応が出てくるのがこの時期かなと思います。家族と出かけることができるというのは結構分かりやすいですし，こういう姿まで持ってくるお子さんというのは僕らもよく見ます。この辺の子どもたちにこんなことをやってみてはと僕らで提案しているのは，子どもの様子をよく見て子どもと相談しながらではあるのですけど，無理のない範囲で小さな目標とかステップを設定してみるというのをお勧めしています。本当にこれは状態によるので，具体例もいろいろあって難しいのですけれども，例えば一緒に買い物に行ってみるみたいな，外に出かけるというのを，じゃあ週に１回は一緒に外に行こうとか，あとは部屋に引きこもっているような子だったら，じゃあリビングのほうで過ごしてみようとか。朝何時までに，これはあまり早くなくてもいいのですけど，朝何時までに起きてみようとか，本当に小さいことでいいので目標を立ててみる。それでまた，できたねということで少し褒めてあげる。こんな時期には，民間の居場所ですとか教育支援センターといったところを話題にしても少し話を聞いてくれたりすることもあります。いきなりここに行けるかというとまだ難しかったりもするのですけれども，話題にして少しこれから先を考えられるかなという時期に入ってくる，そんなタイミングかなと思います。

最後が，そこからさらに回復して復帰期といわれるところなのですけれども，この辺になるといよいよ行動につながってくるような時期になります。これはちょっと僕個人としても分かりやすい合図かなというのは，何か暇そうにしてくるというか，退屈になってくるというのは，１つサインかなと思っています。不登校の子の中でも，不登校だけど別に友だちと遊べるという子もたまにいるのですけれども，そういう子たちはある程度エネルギーがしっかりたまっている時期なのかなと思いますし，このぐらいの時期になってくると授業は受けられないけどちょっと給食だけ食べに行ってみるとか，学校に行って校

長室でお話だけして帰ってくるとか，ちょっと学校みたいな場所に足が向くような姿も見受けられます。こういう時期だと何かにつなげていきたいみたいな気持ちになるのですけれども，とはいえ，焦らずに，本人のペースを尊重して自己決定させていくというのが１ついい関わり方かなと思っております。私たちがやっているオンライン支援につながる際も，最初はちょっと渋っているようなことが多いのですよね。その中でも「ちょっとだけでもやってみない？」とか，「週に１回この人とオンラインでお話しするだけでもやってみない？」とちょっとずつ勧めて，「まあ，それだけならいいよ」みたいな感じで渋々いいよと言ってくれたりするのですけど，渋々でも自分でやってみようかなとか，まあそれぐらいならいいよと言ってくれるそういう自己決定が大事かなと思います。

ちょっと今，〇〇期みたいなのを幾つか出しましたけれども，こういった状態というのは行きつ戻りつするのですね。なので，保護者の側としては「せっかく出てきたと思ったのに，また？」みたいな気持ちになってつらいことが結構あるのですけれども，行きつ戻りつするのだというのをまず理解しておいて，保護者が一喜一憂するとそれは子どもに伝わったりもするので，まず焦らず構えていく，でもちょっとずつやはり前に進んでいるよねというところを認めながら支援を進めていくのがいいかなと思っております。

そんな行きつ戻りつしつつも最終的にはいい状態になったお子さんの例なのですけれども，これは今年から高校生になった子で，中学２年生の頃からオンラインで支援をしていた子になります。この子がコロナ禍をきっかけに中１で不登校になってしまったのですけど，それから不登校を１年ぐらい続けて，２年生になった頃に僕たちのところにつながってきました。最初オンラインでつながると，オンラインというのは画面をオフにできるではないですか，Ｚｏｏｍとかで。顔を出してくれないのですよね。顔を出してくれなくて，ちょっと話しかけてもすごくゆっくり言葉が返ってくるみたいな感じの子でした。かなり緊張が強かったのですけれども，何だかんだオンラインをつなげてはくれるのですよね。これは多分保護者の方が協力してくれたのだと思うのですけど，つながってはくれる。それでつながった先で，なるべくこの子と話題が合いそうな話しやすそうなスタッフをつけたのです。毎週やっているとちょっとずつ声が聞こえてきたり，顔を出してくれたり，ちょっと笑顔が見られるようにもなってきました。ここまででも結構かかっています。１か月２か月でこうなるわけではなくて，４か月とか５か月とかたって，何か普通にしゃべれるようになったなというところに至っています。

そこからは少し変化が加速してきて，先ほどもちょっとお勧めの関わり方を紹介しましたけど，スタッフと一緒に生活や学習に対する目標を立て始めたのですよね。これをちょっとした目標を立てて，この１週間どうだったみたいな

感じで。これはいろいろな目標がありました。僕がすごく面白いなと思ったのは，自分の気持ちを言えるようになるという目標を立てたときがあって，最初は自分のことを話すのがとにかくできない子だったのですけど，対面をすることを重ねてちょっとずつ元気になった先に，自分でそういう目標を立てるようになるのだというのがすごく印象的でした。

そういう目標を立てて，ちょっとできたかな，いやまだあまりできていないかな，とか言いながら過ごしていくと，中２の３学期ぐらいから「ちょっとだけ学校へ行ってみようかな」とか，「１時間だけ行ってみようかな」みたいなそういうステップを踏むようになって，中３になると週に１回くらいは学校に行けるようになりました。中３になるとやはり進路に関心が向いてくるので，この子と進路の話もする中で全日制高校へ進学したいのだという希望を持って，そこからは私たちのオンライン支援の中でも特に学習支援を使いながら高校受験に向けて勉強して，最後は合格して，今は高校に通っています。

うれしかったのは，高校生になってから，中学生のとき不登校でどんなことを感じていたか，今，不登校の子どもたちにお話ししてくれないかと言ったら，私でよければ話しますと言って，ある意味先輩として話をしてくれるようなことがあったのですけれども，これだけ見るとすごくきれいに進めているように見えるのですけど，やはりこの中でもすごく停滞した時期もありますし，学校にちょっと行ってみたけれどもやはりここ苦しいと言ってちょっとまた１回行かないみたいなそういうのを経て，行きつ戻りつしながら最後はこうなったという，そんな子どもでした。

本当にずっと右肩上がりでよくなっていく子というのは，僕はあまり見かけないかなと思っています。行きつ戻りつがありますよねということは，やはり保護者の方が焦らずに支援をするためにも大事な理解かなと思います。

これは不登校というわけではないのですけれども，いわゆる誰にでもある思春期特性としてちょっとおさえておいたほうがいいかなと思うところを紹介しようと思います。思春期は，脳が爆発的に発達して体にも急激な変化が起こるということで，これは皆さんも何となく分かるのではないかなと思うのですけれども，ちょっと例として軽自動車が急にスポーツカーになるみたいなことを比喩で話したりすることが多いのです。やはり自分の変化についていけなくて自分をコントロールするのが難しい時期ですよね。精神的にも身体的にも。

合わせて，やはりこの時期というのは自己を確立していくような時期です。１回築いた土台を１回壊して，もう１回改めて自分で作っていくような時期になりますけれども，ある意味手探りで自分自身というのは一体どういう人間なのかを探していく，もがいていく時期にもあるかなと思います。

その時期であるのは，やはり，今，反抗期みたいのがなくなっているとか減っているという話がよくありますけれども，とはいえ，やはり自己確立に向

けてもがいているモヤモヤを友だちや家族にぶつけてしまうみたいなことは十分起こり得るし，よくあることかなと思います。喜怒哀楽，感情も激しくなるので，何か周りの人にいろいろな影響が出てくることでもありますし，親子関係が少し変わってくる時期でもあるかなと思います。ただ，そういったモヤモヤを周りにぶつけながら自己理解というのが進んでいくので，ある意味必要な衝突でもあるわけです。ここは何となく多くの方がいわゆる反抗期みたいなものも含めてこういうものだろうと直感するところではないかなと思います。

やはり中学生ぐらいは，大人と子どものはざまにあるような時期ですので，自立したいという気持ちと甘えたいという気持ちの中間で揺らいでいるような時期にもなります。子ども扱いされることに対する反発みたいなものも，特にやはりこの思春期，中学生ぐらいの時期というのは今でも多いかなと思っています。やはりそういったところの親子関係で，保護者の方もまた子どもの変化についていけずに悩む，そんな時期でもあるかなと思います。

こういった時期への対応としては，子どもの変化に対して保護者の方がいろいろ気になるというのは普通のことかなと思います。大人になっていく子どもに対して，将来を心配するとかいろいろな期待するというのは普通なことだと思います。

一方で，今の子どもの状態というのを理解，受容するというのは，この先を諦めるということとはまた違います。これはどういうことかというと，不登校であるという状態をまず保護者の方が受け入れられるかというのがすごく大事だけど，実はすごく難しいことだと思うのですよね。実は僕の親戚でもお子さんが不登校だという親戚がいるのですけれども，やはりうちの子が不登校になるなんて思ってもみなかったということで，受け入れるということにすごく心的な抵抗があるという，そういうのは結構僕は身内からも聞いたりしたのです。別に不登校を受け入れることがもうこの子は駄目だと思うこととは全く別のことなので，まずは一旦受け止めましょうというのを，口で言うのは簡単なのですけれども，難しいのも分かりつつ，やはりそういうふうに受け止めてほしいなと思っています。

３つ目にも書いているのですけれども，理解するというのは，今，子どもがしていることをそのままの形で，今，子どもがそこにこういう姿で在るというのをまず受け止める。何かそこに変な解釈をするのではなくて，まず子どものあるがままの姿を受容するということが非常に大事かと思います。子どもからすると，安心して感情をぶつけられる親というか保護者を求めている場合が多いです。自分の感情を受け止めてもらえたというそういう実感を持っていくと，その子どもの感情がある意味で大きくこじれずに長期的にコントロールできるものになっていく，そういうケースが多いかなと思います。もちろん必ずしも保護者でなくてもいいのですけれどもね。でも，どこかでやはり自分の感

情を受け止めてもらえる，できるならば自分の親にこそ受け止めてもらえるというのは子どもの大きな安心感につながっていると感じています。

ここまで多くの子どもに見られる，私たちが見てきた子どもたちの傾向をまとめたようなところをお話しさせていただきました。

ここからは，カタリバの具体的な取組を少し紹介させていただきたいと思います。最初にお話ししましたけれども，大きく３つあるのですよね。教育支援センターと，足立区の中での居場所施設と，オンライン支援と３つあります。それぞれちょっとご紹介しながら，あと不登校支援にはやはり重要な学習支援についても少しここでお話しさせていただきたいと思います。

最初は島根県の教育支援センターのお話になるのですが，どんなことをやっているかというのを最初に簡単に紹介します。ここは廃校になった小学校を利用しています。昔ながらの素敵な校舎です。ここを利用して対面での居場所支援と家庭へのアウトリーチやＩＣＴを活用して，行政・学校・家庭と連携しながら不登校の児童生徒に伴走していくということをしています。

アウトリーチとここ何年かでよく言われるようになりました。やはり支援の場所を用意してもそこにつながってこられない子どもたちやご家庭というのはどうしても多いのですよね。訪問型の支援ともいいますけど，まずどうしても来られない子に対していわゆる家庭訪問などをしていきます。子どもに会えない場合は，まずは保護者とお話しします。まず家庭にお邪魔して保護者とつながりを作っていく。ほかにも，同じく不登校で悩まれている保護者の方のおはなし会のようなものを作って，保護者同士がつながって悩みを話し合えるようなそんな関係性を作っていく。さらに，保護者からご家庭にいる子どもの様子を把握して，ちょっとずつまずは家庭訪問からして子どもに会えるようにしていくこのアウトリーチはすごくこの施設では大事にしている取組です。

一方で，やはり学校が子どもたちの情報を一番持っていることが多いですよね。なので，学校にもスタッフが顔を出させていただいて，最近この子どうですかとか，あとはこの教育支援センターに通っている子たちが在籍する学校に最近この子はこんなふうに過ごしていますよということをお伝えしたりして，点で支援するのではなくて，できるだけ学校も子どものことを分かっている，教育支援センターでも子どものことを見ている，ご家庭でも子どもにこんなふうに関わったらいいのではないかということを考えられる，ちょっとずつ点を線に，線を面にして支援の幅を広げていくということを大事にしております。

ちょっとここは島根県の話は一旦飛ばしてしまうのですけれども，ここでも教育支援センターの中に出てくる子どもたちの変化というのがどんなふうに起きているのかというのを少し紹介したいと思います。雲南市の教育支援センターは，先ほど言ったように施設に来る子どもとかこちらから家庭訪問で会いに行くような子どもとかいろいろ接点の作り方があるのですけれども，特徴と

しては，学校ともうまく連携することで支援した子どもたちの７割くらいが学校に再接続されています。もちろん，今は学校に戻ることがゴールではない，それだけが全てではないよね，というのが近年の不登校支援のトレンドというか，大きな方向性だとは思うのです。とはいえ，雲南市のような島根県のかなり人口の少ない山間部なので，あまり学校以外につながる場所がそんなになかったりもします。そういったところで学校との接点を持つ，でも学校だけだと行ききれないから教育支援センターとも接点を持つというふうに，うまく併用している子どもたちが多いです。

ちょっとこの真ん中にあるケースは，これは地方でよくあることなのですけれども，家からこういう支援の施設が遠すぎて，１人で行けないということがよく起こるのですよね。これは都市部でも全くないとは言いません。やはりちょっと遠くて行きにくいみたいなことは都市部でもあるのですけれども，地方だと結構死活問題的にあります。教育支援センターは 25 キロメートルある，学校までも歩いて 40 分という環境が，もはや不登校の子たちが家の外の支援につなげることの１つの大きな壁になっているわけですよね。こういうのもあって僕たちはオンラインの支援とかをしているのですけど，島根県では最寄りの駅までバスを使って迎えに行くとか，結構交通を工夫することでこういった子たちの支援につなげたりということをしていたりします。

これは，子どもというよりはご家庭についてこんな課題が出てくることがあるよという話なのですけれども，リソースのない家庭で子どもが不登校になるとかなり保護者の方が大変になるみたいなケースが多いです。僕らが支援しているご家庭というのは，１人親家庭がすごく多いのですよ。１人親家庭Ａさんの事例なのですけど，やはり不登校になったときに子どもを日中家に置いてずっと仕事に出るのが結構難しくなってしまうわけですよね。登校を渋る子どもに付き添って心療内科に行くとか，放課後や時限途中にちょっとこの時間だけ学校に連れて行ったりするとか。学校の先生とかスクールカウンセラーに相談行くにも，例えば 17 時までに行かないとそもそもスクールカウンセラーの勤務時間が終わっているみたいな感じで，こんな状況だとフルタイム勤務がやはり難しくて，そうなると就労形態をパートタイムに変えますということで，ここで年収が下がるということが起こってくるのですよね。

これはカタリバが独自にとったアンケートなので回答母数 400 件ちょっとくらいではあるのですけれども，子どもが不登校になったので就労形態を変えました，それによって年収が下がりましたと答える方が３割もいました。これは結構隠れた問題だなと思っていて，実は子どもだけではなくて，特に１人親家庭ですね。リソースが多くない家庭では，いきなりこれがもしかしたら貧困等につながる可能性があるというのは，すごく大事な観点かなと思います。ちょっと実際の保護者のアンケートからとったものを幾つか載せているのです

けれど，これは富山県の方の例なんかですと，お子さんが３人いて長男と次男が不登校。２人不登校になって１人親というのは，これはもう相当苦しいです。こうなると，もう仕事に就くことができなくて収入が得られない。付き添わないと学校に行けないのでそれぞれ送迎が必要で，もうどうしたらいいのか分からないと，本当に困ったようなことがありますし，これはもう地方とかは関係なく都市部でも起こり得ることかなと思います。

ちょっと今のは１つの課題提起だと思っていただければと思うのですけれども，ちょっと別視点で，学習支援で子どもたちにはどんなふうに関わっているのか，学習はどんなことをしているのかということをちょっとご紹介したいと思います。学習支援と一言に言ってもいろいろやり方があるわけですよね。不登校の子どもたちというのは，そもそもそんなに学習したくないよみたいな子が多いので，どんなふうに学習支援，どんなふうに学習に関わっていけばいいのかというところなのですけど，僕らも全くいつもこのとおりにやるわけではないのですけれども，基本的なパターンとしてこんなことをやっています。

まずは，いわゆる子どもが勉強するのを横で見たりとか一緒に質問に答えるみたいな基本的な学習支援がありつつ，定期的に学習に関する面談をしたりとか，学習状況に関するアンケートをとったりですとか，あとは学校と子どもの学習状況について情報共有するみたいな。幾つか学習に関する取組がありますが，ちょっと写真とかで見ていただくと，学習の様子は本当に子どもによって様々なのですよね。パソコンを使ってやるのが好きだよという子もいれば，「いや。もうプリントとかのほうがやっぱりやりやすくていいよ」という子もいれば，もう１人でやったほうがいいという人もいれば，ちょっと横でスタッフが教えてくれないとやる気がでないみたいな子もいるので，基本的には子どもそれぞれのやりやすい形を尊重しています。

特に大事にしているのは，やることを自分で決めて進めていくというのを大事にしているのですよね。大体その日の最初に今日は何をやるというところから話が始まっていきます。みんなすごく丁寧な計画を立てるとかではないのですけれども，「今日はちょっとこの数学のページをやるよ」とか，「今日はこのプリントかな」とやることを決めて，その時間学習に向き合って，「やると決めたのどのくらいできた？」みたいのを最後にお話ししたりして，そこで教科の知識を身につけることよりも，これをやると決めたことをちゃんとやったねというこの実感を積み上げることのほうが，不登校の子どもたちにとっては大事なのではないかなと思っております。それがまた子どもたちの自信にもなっていきます。学習時間の予定をホワイトボードに書き出して，今日は誰々ちゃんはこんなことをこの時間でやるのだねとかを書いたり，あと，そもそもどんなふうに勉強しようか迷う，よく分からないみたいな人もいるので，こんなふうなやり方があるよね，みたいな学習の仕方をいろいろ紹介するような掲

示物を作ったりもしています。

振返りをするというのも１つ大事にしているところです。学習のその日の最後に，「今日何が分かった」「何が難しかった」ということをほんの一言でもいいので言葉にしてみる。こういう毎日毎日の振返りもありますし，月ごとに「今月の学習を自分で計画を立ててみたけどどうだった？」という１か月や１週間単位での振返りも可能ならばやっていけると，先ほどのやってきた実感をどんどん積み重ねるということにとってはすごく意味があると思います。やはり「自分は何だかんだこんなにやったのだな」という感覚を持てることが，すごく不登校の子どもたちにとって意味があることかなと思います。ほかにも学習面談を定期的に実施してその子は一体何に苦手意識を持っているのかとか，何が得意なのかとか，子どもの学習上の強みや弱みなんかもこうやって見立てていくようなこともしています。

併せて，目標設定みたいなことも，スタッフの中でもそうですよね。この子はこういうところまで学習ができるといいのでここまで進めるといいねみたいなのを，スタッフの中でも考えたりはしています。

これは多分不登校の学習支援をする中でよくあることなのですけれども，やはり特性が強かったりとか，中にはちょっといわゆるＬＤというか学習障害気味な子とかもいるのですけど，特性のある子にどう支援するかというところで，多いのは集中することが難しいみたいな子がいますよね。これは別に不登校ではなくてもいるとは思うのですけれども。こういうときに１コマの中で細かく時間を区切って休憩しながら取り組むみたいなことですとか，１コマ１教科ではなくて，１コマの中で最初の 10 分は算数，次の 10 分は英語でもいいよというふうに時間の使い方を細切れにしたり，１個のことで飽きてしまう子にちょっとずつ目先を変えてあげる。こんなことも集中するのが難しい子にとっては少し効果があることかなと思います。

例えば座っているのが無理という子もいるので，途中途中立ち歩いてもよかったり，立ちながらホワイトボードに書いて勉強したりとか，こういうことも効果があったりします。ほかには，書くことが苦手という子もいますよね。文字がやはりうまく書けなくて，自分でうまく文字が書けないから，もう書いていくことにモチベーションが上がらないみたいな子もいるのですけど，それこそタブレットやパソコンで学習してみるとか，今だったらスマートフォンの学習アプリとかを使ってもいいかもしれませんし，あとは選択式問題中心に学習していくというのもありですよね。選べばいいだけなので，書くのが苦手でもやりやすい。こういうふうに子どもたちの特性を捉えた上でこれだったらできるかなというのを提案していけると，子どもたちも学習にちょっとずつ褒めながらやれるなという感覚を持っていくことができます。

そもそも学習そのものに抵抗が強い子だと，これは結構難しいのですけれど

も，その子が好きなこととうまく学習要素を絡めてあげるみたいなことができると，少し乗り気になることがありますし，その子が楽しめそうな内容を提案して一緒にやってみるみたいなことができると，ちょっとずつ子どもたちが学習に向き合ってくれることがあります。最近だと，ＡＩ教材とかデジタルドリルとかだと勉強すると勉強した分だけデジタル教材の中のキャラクターが育っていくみたいな，何かちょっとゲーム要素が入ったような教材とかも出ていますけれども，あの手この手で何かこれだったら子どもが興味を持つかなみたいなものをやはり探していく必要がどうしてもあると思います。ただ，やはりこれは保護者の方１人で考えるのは難しいので，先生方も含めていろいろな人と相談しながらこの子の興味を満たしていくのが大事かなと思います。

ちょっとここからもう２つサクサクと紹介するのですけれども，アダチベースという足立区の取組については，先ほどのおんせんキャンパスとやっていることは似ているのであまり細かいことは割愛するのですけど，１つ大事なのがここなのですよね。今日の最初の話で，不登校といってもいろいろな状態があるから，その状態に合わせたいろいろな支援を考えることが大事という話をしました。足立区さんでは，まさに不登校の子どもたちの状態に合わせて，こういう状態の子にはこの支援，こういう状態の子にはこっちの支援を届けていこうと，状態と支援のメニューというのをつなげて構成されているのですよね。

例えば不登校ではあるが，ある程度学校に行けている子は，学校の中に特例課程教室という学校の普通の教室に近いような環境を作って支援が行われるようなものですとか，あとはその下にあるチャレンジ学級みたいなものですね。不登校だけどこの子ども支援センターというところに集まってクラスのようなものを作って，少人数の中で学習していくようなものがあります。この中でカタリバは，比較的困難度が高い子どもたちの居場所の運営を任されています。学習意欲がなくて集団行動が苦手，ただ外出はできる，でも学校には行けないという子どもたちが，僕たちの運営する施設に来て，ほとんど勉強しないで帰る子が多いのですけど，ちょっとだけ勉強して帰っていく，学校とはまた違った居場所でサポートを受けるのがこの居場所支援になります。

それよりもさらに難しい子には，もう家庭に講師が派遣されるというアウトリーチ型で支援するというのは足立区さんなんかもやっていたりしています。こういうふうにやはりターゲットをイメージして，そこにどんな支援があったらこの子には届くのだろうというのがすごく大事なことかなと。やみくもにやると，せっかく作ったのに結局子どもが使っていないということが結構起こってしまうのですよね。という中で，足立区の施設は基本的には小学校５年生から３年生を対象にして，先ほどの特に困難度が高い，外出はできるけれどまだまだ学習意欲がない子というのを想定しながら居場所運営をしています。

場所としては，様々な体験支援と食事支援と学習支援の３本柱でやっていて，体験というのはいわゆる学校に行っていたら得られるであろう芸術の鑑賞教室とか運動会とか，修学旅行はちょっと僕らはできないですけど，運動会とかをやったりします。学校に近い体験がちょっとでもできるようにということで体験支援をしたり，経済的に苦しいご家庭の方を呼んでお昼ご飯を一緒に食べるとか，学習支援は先ほどお話ししたような形でここでもしっかりとやっております。

足立区の場合は中学生がメインターゲットなので，高校受験の伴走を少し手厚くしているというのが１つ特徴になります。東京都は，いわゆるチャレンジスクールなど中学校のときに不登校だった子どもを積極的に受け入れる高校が複数ありますので，そういうところの受験を意識して面接の練習をするとか，そこで入試の課題として出る小論文の書き方を教えていくみたいなこともここではやっております。

最後がオンラインの支援です。「ｒｏｏｍ－Ｋ」というものですけれども，ｒｏｏｍ－Ｋはメタバースを使っているのですが，オンライン上の教育支援センターというコンセプトを作って，子どもたちの居場所をメタバースで作っております。これは，ちょっとメタバースはそもそもどんな感じかというのを話だけだとちょっと分かりにくいと思うので，３分弱ぐらいの動画を見てもらいたいと思います。

（動画上映　01：00：24～1：03：26）

講　　師：ｒｏｏｍ－Ｋは今，見てもらったようにメタバースで居場所を作ってそこで様々な学習だけではなくて，メンターと呼ばれるスタッフや支援計画コーディネーターと呼ばれるスタッフが子どもたちに伴走する。伴走というとあれですけれども，定期的な面談などを通じて子どもたちとしっかり接点を持って関係性を築いて，そこから支援者が子どもたちにとって一番安心できるようなそんな存在になった上で，ちょっとずついろいろな学習の機会に誘い出していくような，こんなことを大事にしています。

最後，学校や自治体への連携をということだったのですけど，やはり本当にこういった支援が必要な子どもたちにつながっていくためには，教育委員会や学校の先生方からこの家庭のこの子には，この支援が合うのではないかというのをちょっと考えてもらって，そこに紹介していただく，それから僕らのところにつながってくる，こういう経路を使って子どもたちを受け入れるようにしています。なので，基本的には連携している自治体の学校に説明資料を置かせてもらって，担任の先生などから保護者の方にご紹介いただいて，保護者の方に私たちの説明会に来てもらう。実際に支援が始まったら教育委員会や学校に子どもの状況を定期的に口頭等でお伝えすると，そういう形をとっています。やはりこれも子どもたちがオンラインだけにとどまらずにリアルにまたつな

がっていく，そういうことも見越してしっかりと関係者，先生方，教育委員会の皆さんと情報共有しながら支援をしていく，そんなことが大事だなと思ってこういう体制を作っています。

最後に具体的なケースを２つほど紹介しようかなと思います。この点は，もしよかったらまた質問などでも聞いてもらえたらなと思うのですけど，本当にいろいろな子がいる中で，印象的なものを持ってきました。

コミュニケーションがすごく苦手な中学１年生の子のケースがありました。この子は血圧の不安定さなどがあって，全く行きたくないわけではなかったのだけれども，どうしても遅刻欠席が多くなってしまう。コミュニケーションがすごく苦手というのがあったので，初めは私たちとつながっても全然話してくれなかったのです。どうしようかなと思ったとき，とある漫画がすごく好きで，その話をしているときは楽しそうなのですという保護者の方の話を聞いて，しばらくはずっと同じでもいいからその話題でいこうということで，先ほど話したメンターがその好きな漫画の話をしたらちょっとずつ話をしてくれるようになりました。そうすると，やはり仲良くなってくるので，それ以外の話でも徐々にできるようになってきて，オンラインの支援なのでパソコンを使ってやるのですけれども，自然とパソコンがどんどん使えるようになってくるのです。気づいたら，多分同じ年代の学校の子よりも自分のほうがパソコンを使えるみたいなことが出てきて，それがちょっと自信になってきたのですね，この子の場合は。そうすると，やはり自信を持てるということが僕は回復のための大きな一歩かなと思っているのですが，ほかのことにも行動がつながってくる。こういった学習支援に参加できたり，本当に全然学習に対して意欲がなかったところから英検にチャレンジするみたいなことを自分で言い出したりという変化が見えてきた，そのような子どもでした。

この子の場合は，本当に最初ほとんどしゃべってくれなかったのでどうなるのかなと思ったのですけれども，やはりこれはこの子以外にも言えることなのですけど，何か好きなことだけはそれなりに話せるという子は結構多いです。どうしても大人から見たときに，「この子，ゲームのことばかり話すけど，このゲーム全然分からないな」とか「このアニメのことばかり話すけど全然知らないな」ということが起こってしまうのですけれども，やはりそこでちょっと一緒に話してあげるような人がいるだけで，結構いつもと違う姿を見せるというのを僕らは結構見てきました。

僕も，去年小学４年生ぐらいの女の子で，当時やっていたチェンソーマンというアニメがすごく好きな子がいたのですけれども，チェンソーマンのことを話せる人がいないというので誰か探しているのですとその子のメンターに言われて，チェンソーマンのことを知っているのだったら話してくれませんかと言われて話したら，１時間ぐらいその子はしゃべりっぱなしでした。そのぐら

い好きなものは話せるという子は結構多いので，そこに付き合ってあげると言うと変ですけど，合わせていけるかというのは大事かなと思っています。

カタリバはずっと「斜めの関係」という言葉を大事にしているのですけれども，やはり先生とか専門家とかではなくて，同じ趣味を共有できるちょっと年上の人とかだとやはり話しやすかったりするので，今のアニメの話もそうですけど，やはり気兼ねなく話せる人をいかに作れるか。それは別に専門家でなくてもいいのでそんな関係性を持てるかどうか，不登校の子の中に作っていけるかというのは，すごく回復においては重要なことかなと思っています。

それで，もう１つですね。この子は積極的不登校と言われるようなタイプの子なのかもしれないですけれども，小学校１年生のときにもういきなりお母さんに「僕はあしたから学校行かないから」と宣言した子がいました。何かいろいろ背景はあったみたいなのですけれども，教室の騒がしさとかにやはり敏感なタイプの子なのでそれがちょっと嫌だったり，結構この子は言ったら賢い子でもあったので，別に自分でも勉強できるともしかしたら小１にして思ったのかもしれないのですが，宣言するようなことがあって，そこから何年かしてからカタリバにつながってきました。印象的だったのは，すごく探究心が強い子だったので戦国武将にはまっていたのですよね。自分のあだ名を「僕は秀頼と呼んでくれ」と。豊臣秀頼と呼んでくれと言って珍しい子だなと思ったのですけれども，やはりすごく詳しいのですよね。戦国武将についていろいろ話すから，「それをもっと調べてみんなに話してみたら？」と言ったら火がついて，いわゆる学校の調べ学習みたいなことをオンラインで自分で当時やっていったら，その調べたことをスタッフがすごいねと聞くとすごく喜んで話して，またもっと調べてくるのですよね。

それで，そういう姿をほかの利用者の前でプレゼンするとすごくやはり生き生きして，学校の中に入っていかなかったので勉強はするけどずっと１人みたいなところから，何かこうやってほかの人とも関わることができるのだ，それでこうやって生き生きする姿を見せてくれるのだということで，保護者の方もすごく安心したということがありました。保護者の方はやはり，何だかんだ言ってもやはり学校に行かなければいけないのではないか，この子の在り方は本当にいいのだろうかとすごく悩まれていたのですけれども，この姿を見て「もしかしたら学校に行くことを唯一の正解にしなくてもいいのではないかと思いました」とお話しされていたのがすごく印象的でした。

ただ面白いのが，こうなったのですけれども実はこの後ちょこちょここの子は学校に行くようになったのですよ。突然オンラインで会ったら，今日午前中に学校に行ってきたみたいなことを言っていて，「行ったの？」みたいのが出てきたと。だから，何が本当によかったのか分からないのですけれども，やはり自分として人と関わる楽しさを感じたり，何か自分の行動が認められたり，

生き生きしてエネルギーがたまってきたことも，もしかしたら学校に行ったことにつながるのかななんて感じています。これはちょっと面白いですよね。この子は学校に行かなくてもいいのかもしれないと思ったら，今度は逆に学校に行くというのが面白い，やはり予想できないところかなと思います。

この子に関しては，小１から不登校なので自治体の中では知られていて，教育支援センターのスタッフの方とも私たちはお話ししながら支援を進めていました。教育支援センターにもこの子は実は顔を出せるようにもなったりしたので，教育支援センターでは最近 100 マス計算をやっていますよとか，カタリバでは最近こんなことをしていますよみたいな感じで，関係者が情報共有しながら，じゃあ今こんなふうに関わるといいかもしれないですねというのをチームで対応できているといった，そんなケースになります。

やはりこうやってその子のことを分かっている人が増えれば増えるほど，保護者の方も安心するのですよね。最初にも話ましたけれども，こうやってやはり支援を点から線に，面にと広げていくというのがすごく大事なことだし，できるだけそうありたいものかなと思います。

ということで，とても長くなってしまって申し訳ないのですけれども，私としては最後の話にもあったように，やはり子どもたちがつながれる支援というのは１つよりも２つのほうがいいと思いますし，その子のことを理解してくれている人が増えていくというのがすごく理想的なことかなと思っております。現在，やはり公的な支援が十分ではないという現状に対して，やはり支援や居場所の選択肢は増えていってほしいし，１個１個のその支援の選択肢の質が高くなってほしいし，でもそれだけだと実は足りなくて，そこによりよく接続されるようにどんな取組をしていくのかというのがすごく大事ですし，子どもの状態に合わせたマッチングも必要かなと思います。そのためには教育委員会の皆さんを中心とした，この自治体の中にどんな不登校支援の選択肢があるのか全体を把握して総括していく，コーディネートしていくような視点が非常に重要かなと思っております。皆さんが考えられる支援も，一体自治体の中にどのような対象としたものとして置いていくのか，どんなことができると子どもたちが支援にうまくつながっていくのか，そんなことを検討していただけたらいいのではないかなと思います。

では，非常に長くなりましたが，私からは一旦ここまでといたします。ありがとうございました。

会　　長：瀬川さん，どうもありがとうございました。

それでは，質疑応答のほうに移りたいと思います。皆様，これまでお話しいただいた内容を踏まえて，ご質問等ある方いらっしゃいますでしょうか。

委　　員：先生に質問というよりは，国分寺市が置かれた状況がどうなっているのか知りたいと思ったのと，あと，もしこれがなかったら始めるべきところというのは，

全部一遍には無理だと思うのですよね。どこから始めればいいのかというのを，ぜひ行政の方がいらっしゃるので先生のお考えをお聞きしたいです。

講　　師：前段の国分寺市さんがどうなっているかというのはぜひ聞いていただいて，その前段としてどこからというところもあるのですけれども，これはちょっと私の考えになるのですけど，やはり教育支援センターが支援の中核を担うことができると最もよいのかなと思います。本当に最近なのですけれども，文科省から校内教育支援センターの設置だったり，教育支援センターの機能強化に対する確か補正予算を組みますみたいなことが日経新聞に出ていたのですけど，やはり教育支援センターまたは教育委員会が中心になって自治体の中にいる不登校の子どもたちの状況を把握できるような体制を作っていくということが必要かなと思っております。やはり現状把握がないと，やみくもに居場所を作っても本当にそこに子どもたちがつながってくるのか，今いる不登校の子どもたちに対する支援が本当にヒットするのかというのはやはりちょっと分からないので，できるだけ各学校からしっかり子どもたちの欠席状況に加えて，可能であればその子どもたちがどういう様子なのかという情報を取って，現状把握，このような子がどのくらいいるのかというのを可視化していくことがまず第一歩であるのではないかなと考えています。

委　　員：ありがとうございました。

会　　長：ほかの方，ご質問等いかがでしょうか。では，私から。ありがとうございました。先ほど，ｒｏｏｍ－Ｋの支援計画コーディネーターさんとメンターさんがいらっしゃるということなのですけれども，それらはカタリバさんのスタッフの方がそれぞれ対応されているのかということと，あとはそれぞれの役割をもう少し詳しく教えていただけますでしょうか。

講　　師：分かりました。まずは，カタリバのスタッフが対応しています。ただ，カタリバの職員ではなくて，業務委託という形で，全国でリモートで活動をしてくれるこういった支援者の方々を採用させていただいて活動していただいているという形になります。

支援計画コーディネーターは，その名のとおり子どもたち１人１人の個別支援計画を作るというのが大きな役割です。定期的に保護者の方とこの支援計画コーディネーターはお話しするのですよね。保護者の方からそのときそのときのお子さんの様子をしっかり聞いて，まずこの子に対してどんな目標を持ってどんな支援をしていくのかという計画を立てて，更新してというのを繰り返していきます。一緒に支援に当たるメンターとともに，子どもたちへの関わり方というのも計画して，いわゆる支援全体をリードする役割がこの支援計画コーディネーターになります。この人たちは，ある程度元教員の方ですとか心理士さんだったり何らかの教育現場，福祉の現場等での活動経験が３年以上ある人ということで，専門家とは言わないかもしれないですけど，ある程度経験

のある人を採用しています。

一方でメンターは，こちらはもう本当に週１回子どもとしっかり顔を合わせて子どもと仲よくなって，丁寧に子どもの話を聞ける伴走者のような存在がメンターになります。この人たちは支援計画コーディネーターに比べると経験や専門性というところは少し劣るのですけれども，やはり専門性があるから子どもに寄り添えるというわけではなくて，やはり子どもとしてお話ししやすいような，しっかりと子どもに合わせたコミュニケーションができるような人たちがメンターになります。

両方とも募集・選抜するときに研修をして活動いただいているというような形になっていて，両方が大事かなと思っております。

会　　長：ありがとうございます。追加での質問なのですけれども，実際にオンラインで学習支援を受けているときに，その場にいるのはメンターさんがいるという感じなのでしょうか。

講　　師：そうですね。基本的にはメンターさんがいるのですけれども，いわゆる学習支援に強みがある，例えばカタリバの職員もいますので，そういうスタッフが関わっていくこともあります。

会　　長：コーディネーターさんは常にいるわけではないのですか。

講　　師：そうです。コーディネーターさんはもちろん子どもとの接点もあるのですけれども，そんなに頻繁に接点はなくて，どちらかというと保護者の方とお話ししたり，その支援の状況を学校や行政の方と共有したり，ちょっと俯瞰して見るような立場の人がこのコーディネーターです。

会　　長：ありがとうございます。

あとはいかがでしょうか。では，もう１つ聞いてもいいですか。先ほどメタバースのものを拝見して，いいなと思ったのが，スタッフの方は投げかけを言葉でしているのですけれども，回答は子どもたちが画面全体で選択したりとか，話せなくてもいいのだと思ったのが，逆にこれはいいなと思ったのです。実際にその場では必ずしも会話をやり取りしなくてもいいよ，という設定での活動支援なのでしょうか。

講　　師：そうですね。やはり無理強いすることはしていません。しゃべってくれる子は何だかんだ言ってそんなに少なくはないのですけれども，顔を映したくないという子はすごく多いですね。特に中学生は多いです。なので，僕らとしてはある意味せっかくのメタバースでもありアバターなので，無理に顔を合わせなくてもいいよという話はいつもしていますし，それでもしゃべってくれたり，もしくはチャットでもコミュニケーションがとれるので，まずはその子が参加しやすい形でというところから始めています。

会　　長：場合によっては，もうずっとチャットとか画面上のやり取りで終わるコミュニケーションのとり方をするだけで終わる子もいるのですね。

講　　師：そうですね。もちろん中にはそういう子もいますし，支援が始まって２年間ぐらいずっと顔を見せてくれない子とかもいました。でも，そういうとき，２年たって顔を見せてくれると結構うれしいのです。そういうこともあります。

会　　長：それぞれのペースでというのがあるということですね。

講　　師：はい。そのとおりです。

会　　長：ありがとうございました。ほかの皆さん，いかがでしょうか。無いということでよろしいでしょうか。

　では，ありがとうございます。改めまして，皆様拍手をお願いいたします。瀬川さん，どうも本日はありがとうございました。

事 務 局：ありがとうございました。それでは，勉強会としての講演は以上となります。講師の先生はここで退席となります。また，この後，協議をするために机の配置変更などをしたいと思いますので，ここで５分ほど休憩時間を設けさせていただければと思います。

会　　長：それでは小休止ということでお願いいたします。

（休憩）

事 務 局：ご準備ができましたので，協議会を再開いただければと思います。よろしくお願いします。

会　　長：それでは，次第の第３「今後の活動計画について」というところから再開したいと思います。まず主題に沿っていきますと，前回の協議会で皆様とイベントをやったらどうか，成果物はどうするか，などいろいろと議論をした中で，結果として成果物としての啓発物を制作していこうということに決まりました。本日の講演で学んだことを生かしながら，次回から成果物に関する具体的な協議を進めていきたいと思っております。

　まず，本日の講演の感想等，皆様の率直なご意見などをいただいて，次回以降の活動に生かしていきたいと思っています。まず，今日のお話の内容について，国分寺市はまず教育委員会としてどういうふうに今，不登校支援をやっているのかということ，それからぜひ今日の内容を教育委員会にも共有してもらいたいといったお話を頂きましたが，補足等がもしあればお願いいたします。

委　　員：大変貴重な経験をさせていただきまして，ありがとうございました。すごく勉強になりました。私はＰ連活動をしていてＰＴＡなので，より教育委員会寄りといったらあれなのですけど，まさに小学生や中学生を対象にやっているのですが，今日のお話がすごく勉強になったので，今日の所轄が市長部局さんなので，教育委員会さんも含めた形で今日のような活動の場があるといいなと思いました。

　多分カタリバさんのこととかはご存じだと思うのです。ただ，話の中で，私もカタリバを，ＰＴＡをやって，この話の中で初めて調べて，テレビに出たという保護者もいたりしてその後調べたので，そのぐらいのレベルです。多分

ＰＴＡの中の親でも知っている人が半数いればいいかなと。たまたまテレビを見ていたから知っていました，という人もいると思うので，それぐらいの話なので，国分寺市として教育委員会さんもしっかりと活動をいろいろなところでやられている。特に足立区さんで中学生に特化しているという話がありましたけれども，できれば小学生，中学生に広くできたらなと思うので，ぜひ教育委員会さんとも連携をとれたらなと思いました。今日の資料がもし一部でも頂けたらということを事務局さんにお願いしたいのですが。

事 務 局：ごめんなさい。事前に資料の送付を伺った際，送付はなく投影のみとのことで回答をいただいております。

委　　員：駄目なのですね。

事 務 局：今回，通常の講演依頼とは違う形で，無理を言って講演のご依頼をさせていただいている経緯があります。

委　　員：分かりました。ありがとうございます。

会　　長：ありがとうございます。

委　　員：もう１点いいですか。もしできましたら国分寺市としての体制を作っていただきたいという要望です。市として今こういうのがありますよというのが図解で。前から申し上げていますけれども，ホームページでなかなか分からないというのは，今の政策部さんもそうですけど，追っていくと部ごとにいろいろあるのですが，不登校というテーマで横串を刺そうとすると１つずつ開いていかなければいけないのですね。それも含めて，窓口はここですよというと，意外と教育に関しては教育支援センターにいく。でも子どもの持っている問題については子ども家庭支援センターみたいなことになっていて，実はそこはつながっていますよというところが連携が取れていない気がするのですよね。私が活動していて思っているだけなのでそうでないのかもしれませんけど。横串があるのであれば横串がありますという図解が欲しいです。それが先ほどのカタリバさんの図だと思うのです。あれは結構解決になると思うので，ああいう図を作っていただけたらなと思います。それにＱＲコードが連絡先で入っていると，一番初めにアクションにしたいと言っていた目標に１個たどり着くのですが，その図解があれば，親がぱっと見たときに，こことここことに連携すると何か情報をもらえるかもというきっかけになるので，もしポスターを作るならそういう図を作るというのがこの協議会の活動の１つになるといいなと，私は今日の講演を聞いていて思いました。以上です。

会　　長：ありがとうございます。

委　　員：あれを１つのゴールにすると非常にいいと思いました。もしなければですよ。あるなら教えていただきたい。

会　　長：ありがとうございます。先ほどのカタリバさんのお話は，教育委員会，教育支援センターが中心になって積極的に不登校支援というのをいろいろなバリエー

ションを持ちながらやっていこうという自治体の取組の中に位置づけられていると理解しております。恐らく国分寺市も不登校支援というのは教育委員会自身がされている教育センターのほうで対応している部分というのはあると思うのですけれども，いろいろな行政機関の縦割りを，横のつながりを持って連携してやれているのかとか，そういった部分というのは実際どうなっているのかというのは調査というか勉強する必要が我々もあるかなと感じました。

そのほか，今の点でも構いませんし，今日見ていただいた感想とかお考え等何かございますでしょうか。

委　　員：すみません。電車の遅延で 15 分遅れて中途半端なところから聞いてしまったので，ひきこもりの方の傾向が違うとか増えているというのは想像したとおりなのですけれども，やはり後半から見ていて，カタリバの方の資料に体系的に移行期があって推移があってだんだんよくなるというのが，いろいろ場面場面でサインですとか特徴とか傾向とかどういった支援ができるかというのは全く分かっていなかったので，非常に知識として入りやすかったという印象を受けました。

やはり，まだ本当に結局は自分の子どもが当事者にならないと無関心，もしくは情報を入れるということがなかったので，まだ今日の中ではちょっと教育センターというのも実は私にとってちょっと遠い存在で，想像しながら聞いていたのですけど，そこの役割とかを積極的に知りたいなと思いました。ですので，今後作るポスター等でも，やはりいかに関心をまだ持っていない保護者の方が興味を持ってもらえるようなきっかけになるものになるといいなと。私は今日この場を聞いて，すごく興味を持つことができました。

会　　長：ありがとうございます。これまでの議論で，やはり既存の援助があってもそれになかなかつながれない，知らないということが現実にあるということに関して，我々として何かできないかという問題意識だと思います。成果物の中でそういった情報発信というのができるといいかなと感じました。

ほかの皆さんもいかがでしょうか。

委　　員：印象的な部分が，２点。特に思ったことは，不登校という状態を保護者が受け入れることと，この先を諦めたり放棄したりすることとは違うということを言い切っていらして，当たり前のことと私たちは思っていたけど，実際に当事者のお父様お母様にとっては多分すごく大事なことではないかなと思いました。だからこそ一歩前に出なければいけないと。このままでは駄目なのだという部分のやはりベースではないかなとすごく思いました。「在ることという基本的事実を受容すること」というのは大変哲学的で難しいお言葉が書かれてあったのですけれども，不登校という状態にかかわらず，子どもを「在ること」という基本的な事実を受容するというのはすごく親にとっては難しいことだと思うのです。だから，そういう意味でもここの部分がすごく印象的でした。

次にメタバースの件について。まず自治体と学校からの紹介でスタートするという部分がありました。これはすばらしいなと思いました。いわゆる公的な部分には，支えるイコール連携をとられた状態で子どもたちが守られていくというスペースができているというのはすごくすばらしいと思いました。その中で教育支援センターの役割という部分で，現況を把握すること，可視化すること，これが一番重要なことではないかとおっしゃっていましたよね。これが今，私たちにとってやらなければいけないことではないかなとすごく思いました。この部分の２点が，私にとってはすごく印象的でした。

会　　長：ありがとうございます。その子の人生，先の将来を考えていろいろな可能性をつなげていきたいという発想の下で学校経由でのつながりと，多機関で連携していくとそういう支援なのだなと私も感じて，すばらしいなと思いました。

一方で，ただ，学校側の理解がないとうまくつながれない場合もきっとあるのだろうなと感じていて，ちょっと終わった後も少し話をさせてもらったのですけれども。恐らく区としてそれはもうこういうふうにやるのだということを学校にも理解を促して浸透させようという姿勢が教育委員会にあるのだろうなということで，そこでうまく運用ができているのだろうと想像していたのですが，やはりその辺の現場の理解，先生方の理解というのもここで大事なのだろうということも感じました。すごく貴重なお話でしたね。ありがとうございました。

ほか，いかがでしょうか。

委　　員：本当にすばらしい取組をなさっているなということを感じまして，私たちの国分寺市青少年問題協議会としまして，青少年の本当に大きな問題ですよね。それについて私たちは勉強し，議論するというのはとてもこの会としてふさわしいかなと思ったのですけれども，それを成果物に結びつけるというのが結構難しいのかなと思いました。何しろ私たちはこれから国分寺市の状況把握に進んでいかなくてはいけないということをひしひしと感じましたし，状況把握した上でポスターとかそういう成果物に，それを求めている人たちに届くように私たちがどういうふうにまとめ上げるというのが，結構ハードルが高いなと感じました。

すばらしい取組で，グラフもあって，子どもの数が減っているのに不登校が増えている状況というのは，本当に大人みんなが考えて何とかせねばならないと思わないといけないなと思いました。本当に保護者の方とか担任の先生とかそういうレベルではなくて，みんなで考えていきたい問題だなと感じました。以上です。

会　　長：ありがとうございました。よろしいでしょうか。

最後に私もちょっと一言，今のお話に絡めてなのですけれども。やはり先ほども１人１人やはり不登校の理由とか状態が違うのだということを念頭に置

きながら活動されているのだなということがひしひしと伝わってきました。今のお話でも，子どもは減っているけれども，不登校は増えている。ただその中でもやはり全く行けていない子も増えているし，ある程度休んでいるのだけれども学校には行けている子も増えているしということで，いろいろな１人１人の様相がきっとそこにはあるのだということも一方で感じたところです。傾向の話も頂きましたけれども，傾向もあるけどやはり１人１人違うのだということを念頭に置きながら，どういうメッセージを発信していったらいいかをまた考えていきたいと思いますので，次回以降，ぜひまたよろしくお願いいたします。

１つ課題としては，やはり国分寺市の現状を，特に教育委員会における不登校支援の施策目標というか施策的な理念とか，実際にやっている施策ですね。学校現場等もあるのですけれども，そういったものをちょっと把握したいというところが出てきたと思いますので，ちょっとまたそこは事務局とも進め方を協議したいと思います。次回の勉強会ですね。来年の勉強会の中でそこを拾い上げていくのか検討できればと思っておりますので，よろしくお願いいたします。

では，そうしましたらちょっと時間は早いですけれども，次第の４番「その他」に移りたいと思います。事務局のほうから何かございますでしょうか。

事 務 局：初めに，次回に向けて事務局が準備する内容を確認させていただければと思います。先ほどご意見のあった国分寺市においての支援体制のマップ。今日のカタリバさんの最後のスライドのような図解のようなものであったりとか，不登校支援に関してどういうプロセスなのかとか，そういうものが分かる資料とかホームページなどがあるのか，確認してご報告いたします。資料等作成しているものがある場合は，次回の協議会資料としてお示しできればと思っております。

次に，次回の会議日程のご連絡になります。次回は１月 26 日，今年度最後の協議会ということになります。時間は午後２時から，場所は国分寺市役所書庫棟会議室で行う予定です。開催日が近くなりましたら，開催通知と本日の議事録などを一緒にお送りしたいと思いますので，内容をご確認をお願いいたします。もし，議事録の修正がありましたら，期日までに事務局までご連絡をお願いいたします。事務局からは以上になります。

会　　長：ありがとうございました。

それでは，本日は以上をもちまして閉会とさせていただきます。

委　　員：質問していいですか。決まっていないと思うのですけれども，来年度の会議の予定というのは決まっていますか。４月なのか５月なのか。月しか決まっていなかったと思うのですけど，それは分かりますでしょうか。

事 務 局：施設の予約等がこれからというところになるので，まだ未定です。一応４月下

旬というところで探していきたいなということで，第１回目の資料４のところでお示ししているのですけれども，細かい日程はまだ決まっておりません。

委　　員：分かりました。ありがとうございます。

会　　長：４月の下旬ということで。

事 務 局：はい。そのぐらいで調整したいなと今，考えております。

委　　員：そうですか。４月下旬ですか。

事 務 局：会議室の予約が取れ次第，早めにお伝えできればと思っております。

会　　長：これは，空いていなかったら５月になるということもありますか。

事 務 局：その可能性もあります。

会　　長：前になることはあまりないですか。

事 務 局：前倒しすることはないと思います。

委　　員：子どもの進学とか会社のことで，上旬になると多分出られないと思いまして。後ろに行けば出やすくなります。

事 務 局：分かりました。ありがとうございます。

委　　員：ありがとうございます。

会　　長：では，分かりましたらまた早めにご連絡いただければと思いますので，よろしくお願いします。

それでは，本日は閉会といたします。どうもお疲れさまでした。

―― 了 ――